
かわとはきものギャラリー展示・収蔵品の紹介

1. 世界のはきもの（2）

都立皮革技術センター台東支所

かわとはきものギャラリー展示・収蔵品紹介の第2回目は、前回同様世界のはきものについて紹介する。

展示中の主なはきもの



布長靴（ネパール）

この布長靴は、山岳民族のはきもので、底革は山羊でホルマリン系のなめし、底回りは、フチが深盆のように立ち上がっている。フチの内側には麻を縄状にして縫い付けてあり、防寒と同時に足の保護にも配慮されている。甲部分は、民族衣装でも見るような配色の飾りがあり、材料はラシャやフェルト風の布地が使われている。



李王朝期の革沓（韓国）

これは、李王朝期の革製の沓である。このような革製の沓が履けるのは、当時でも限られた階級の人たちだけであって、庶民のはきものではなかった。

底に特徴があり、手造りの鉄鋌がびっしり打たれ、沓そのものの硬さもさることながら、かなり重い。鉄の鋌は凍てついた道でも滑らない工夫からではないかと推測される。甲部分は独特のスタイルで、前も極端に浅い。踵も棒立ちで角度はまったくついていない。多少つま先がそり上がっているとはいえ、かえりがまったくない板のようなもので、履きごころはあまり良いとは思えない。



水牛革の靴 (パキスタン)

この水牛革の靴は、古代エジプトのサンダルや、14世紀にヨーロッパで流行ったつま先の長い靴などを連想させる。アジアでありながら、西欧の古い靴の形態を残しているところがおもしろい。

履き込み口のテープ以外は手縫いになっているが、つま先の細い先まで丹念に縫ってあるところなどは、いかにも民族靴らしい。底は、甲革を三枚貼り合わせにしている。甲の踵部分は、履きやすいように月型を兼ねたベロがついている。底の縫いつけは、木綿糸を数十本まとめたもので行っている。



山羊の毛で編んだ靴 (チベット)

このチベットの靴は、いかにも民族靴らしい土の匂いのする素朴なはきものである。

色は鼠っぽい黒で、染めとは違うしっとりとしたツヤがある。黒い粗い毛を紡いだ本体部、やや細めの白糸で丹念に編んだ履

き込み口など、手間ひまかけて作った靴である。底は麻のような粗い布を何枚も貼り合わせ、さし縫いにして固くしめ上げている。どの部分をとっても、乾燥寒冷地帯のはきものといった造りである。

インドのカシミール地方で産する良質の山羊の毛を紡いだものがカシミヤだが、隣接するチベットもまた同じカシミヤ山羊の産出国である。その国の特産の材料を使い、その国の民族が好む色柄を配した伝統的なはきものが民族靴とよばれるものである。

この靴はまさにそれで、自然と闘いながら共存するチベットの人と風土を、そのまま伝えているように思われる。



刺繍入りヒールサンダル (インドネシア)

このサンダルは、スマトラ島のパレンバンというところで収集されたものである。

インドネシアは、近隣のマレーシアと同様、華僑の進出が多い国である。その関係か、このサンダルも中国風である。

甲はグリーンのパイル地で、甲全体にはかなり精巧な刺繍がほどこされている。だいたい履き古したものらしく、刺繍の半分はすり切れ、色も退色している。

以下に掲載する写真は、かわとはきものギャラリー開設時に展示用に作られた複製品である。



ローマの兵士の靴 (イタリア)



ローマ近郊の農民のサンダル (イタリア)



チョピン (ベネチア16世紀)



貴族の靴 (フランス13世紀)



貴族の靴 (イギリス17世紀)

参考文献

- ・稲川實 世界のはきものあれこれ、かわとはきものNo.35 (昭和56年3月) P17、No.36 (昭和56年6月) P18、No.40 (昭和57年6月) P21,22、No.42 (昭和57年12月) P17